

# 「目印で巡る遠藤ガイド」作成による遠藤地域の理解 オンラインリソースを併用したフィールドワークを通して

熊谷啓孝・高唯・松橋百葉・伊藤団之郎

## 概要

SFCのキャンパスが位置する遠藤地区は、大学の敷地だけでなく古くからの集落や住宅街などを内包している。しかし、SFCの学生は通学に湘南台駅や辻堂駅からの直行バスを利用する者が多いため、大学以外の遠藤地域を訪れることは少ない。そこで、遠藤やその周辺の地区を「地図を作る」「ナビゲーションする」といった行為を通して理解することを試みた。他人の行動を促す意識を持って地図を作り、その地図を持って実際に遠藤を歩くことや、ナビゲーションする側・受ける側に分かれた調査によって、事物所在の把握にとどまらず生きた土地としての遠藤を知ることを目指した。

また今回のフィールドワークは、現地調査とGoogleストリートビュー・Google Earthといったインターネット上のリソースを用いたオンライン調査を行き来して実施した。コロナウイルス感染防止だけでなく、都市過密状態の解消を狙ったテレワークが推奨されるなかで、現地に行かずに現地調査をすることの意味や利点について、実践をもとに考察した。

The Endo district, where the SFC campus is located, includes not only the university grounds but also old villages and residential areas. However, since most of SFC students take a direct bus from Shonandai or Tsujido stations to University, they rarely visit the Endo area and they do not visit outside of the university. Therefore, a map was attempted to understand Endo and to navigate this area. The map was made for others to walk around with this and students did fieldwork, which we were divided into two groups. One for navigating via calling and the other for receiving. We tried to understand Endo not only by what things exist but also how people lives by using streets and lands.

In addition, this fieldwork was carried out by field surveys and online surveys using resources on the Internet such as Google Street View and Google Earth. While telework is recommended, we discussed the meaning and advantages of conducting field surveys without going to the site based.

## 実施したフィールドワーク

### 1. ストリートビュー上でのフィールドワーク

オンラインリソースを利用した調査よりも実際に現地に赴いて行う調査の方が得る情報量が多いと考え、あえて実地調査を行う前にGoogleストリートビューを移動して行うフィールドワークを実施した。フィールドワークを行う上でのルールは以下の通りである。

1. 調査者は全員遠藤以外のバラバラの場所に滞在し、手元でGoogleストリートビューを開く。
2. 調査者同士はZoomを利用して音声によるコミュニケーションができる状況にする。
3. 音声以外での情報共有(画面共有など)は極力利用しない。

1時間程度のオンラインフィールドワークを行った。移動に際して自分の現在位置を共有するとき、人やバイクやバスといった普段は動いていて目印として利用できないものを目印として利用できた。これはストリートビューが全天球写真の集合で構成されていることに起因する。また、基本的に車道に沿って記録されていることから、道路標識などが目印になりやすかった。一方、建物の表札などの小さいものは、解像度が足りないことから視認性が低く、目印になりにくいことが指摘された。

### 2. 1で歩いた道を実際に歩いてみる

3-1でGoogleストリートビューを利用して散策した道を、実際に歩いて調査を行った。



図1：3-1(ストリートビュー)で移動した道のり

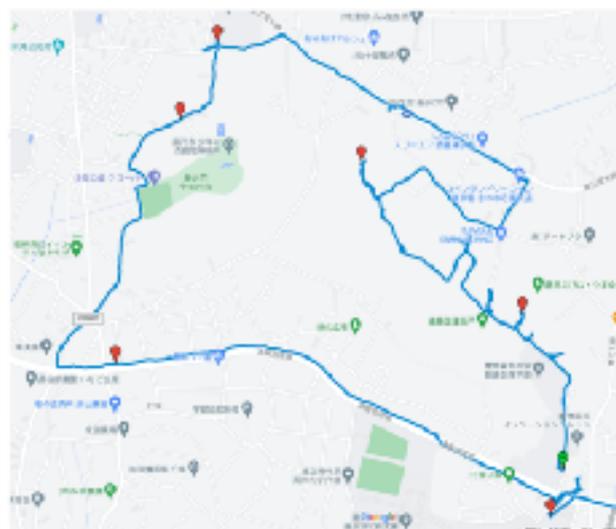


図2：3-2の実地調査のGPSログ

ストリートビューに比べて実際歩いてみると、ストリートビューでは入れなかった細い道を多数発見した。また、ストリートビューでは目立たなかった立て看板や道祖神などに目が行った。草木の匂いや音声情報の多さも指摘された。

調査中GPSで移動のログを取り、振り返りの際Google Earthで読み込み重ねた。ストリートビューと実地調査の両方で観測できなかった広い視点での位置を把握することができた。



図3 : GPSログをGoogle Earthに重ねたもの。  
実地調査時に地図上に道が記載されておらず迷った場所が、実際はどこであったかが確認できた。

### 3. 遠隔にいる人が実地調査者に移動指示を出す

2で行ったGoogle Earthでの振り返りで指摘された地図と実地調査で得るスケールの違いに着目し、調査者を「現地には行かずGoogleEarthや地図を見て指示を出す人(以降指示者)」「現地に行って地図を見ず、指示によって行動する人(以降現地調査者)」に分け、2時間程度のフィールドワークを行った。両者の連絡は音声のみに制限し、指示者のインターネットリソースの利用画面と、現地調査者が持つカメラ映像を記録した。

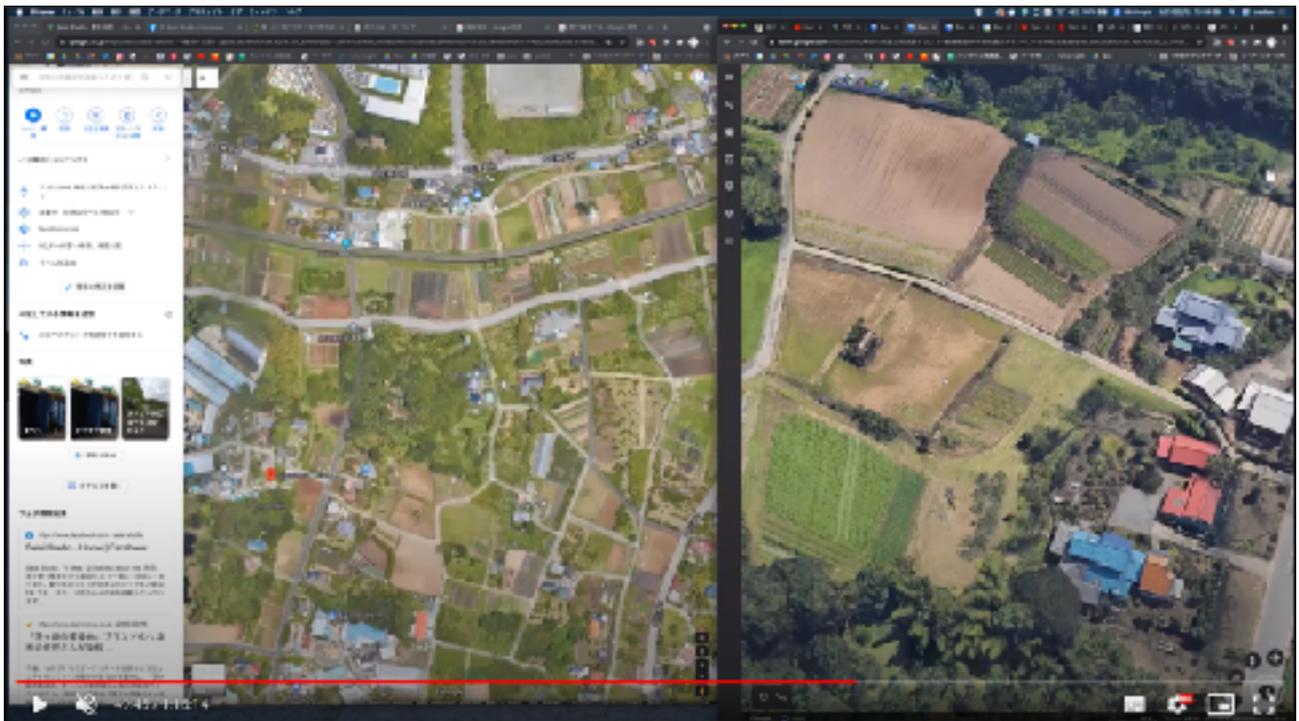


図4 :指示者の操作画面。航空写真地図(左)とGoogle Earth(右)を見比べながら  
現地調査者の現在位置を推測し、次に向かう場所を指示した。

オンラインからの指示者は現地調査者に対し、インターネットリソース上で確認できる目印を伝えることで歩行を促したが、現在位置から近い目印であっても現地調査者は坂や木といった障害によって確認できないことがあった。また現地調査者が指示者に現在位置を共有する際、坂や道路の舗装など道の状況、小さいものや色が背景色に近いものがオンラインリソースでは確認しづらく、共有に向かなかった。

#### 4. 言葉地図の作成と比較

3でナビゲーションの際にどのような言葉を使うとわかりやすくなるかという議論が出たことをもとに、現地を歩く人に文章のみでルート伝えるもの=「言葉地図」を作成した。

以下、言葉地図制作時の条件である。

1. 事前に決めた道を、調査者全員が一緒に歩いて言葉地図作成のための調査・記録を行う。
2. その土地に詳しくない人が言葉地図だけを使って正しいルートを歩くことができるものにすることを目標にした。

フィールドワーク終了後、それぞれが制作した言葉地図を見比べ議論した。同じ場所での表現でも、何を目印としたかがそれぞれ異なった。

ジャンボゴルフ前から駅方向(ジャンボゴルフが左手に見えるように)  
 上り坂  
 通なりに、コンビニの空きテナントを通り過ぎる  
 通り過ぎて一つ目の交差点、とまれの標識のところをひだりにまがる(ほぼシターン)下り坂  
 わいじろをみぎ  
 すぐ右に入る道をはいる。道沿い右手に黄色い壁の家。少し上り坂。  
 つぎあたりひだり  
 高取さんち方向  
 次右に入るところ石(ピンクっぽい壁の家の角)  
 交差点とおりすぎる  
 突き当たり右(前が白石さんち)  
 つぎひだり 水色の物干し竿がにほんあるおうちの角  
 次の交差点ひだり カーブミラーが2個ある角  
 左側が畑  
 まっすぐ  
 呉後園っぽいところを左 曲がるところの右の家がこども百十番  
 左手に高さの低いカーブミラー  
 左に貯水池？  
 止まれ直進  
 正面に不法投棄禁止があるところ突き当たり右  
 左が森だか林だかになるように進む  
 右が第3公演

図4：メンバーの一人が作成した言葉地図



- 松尾：突き当たり左。高取さんち方向
- 伊藤：つぎあたりT字路を左へ
- 熊谷：右手側におしゃれな家のある突き当たりを左に曲がる。
- 高唯：左手の最後の角を左に曲がります。16.52

図5：同じ地点での記述。目印にするものが作成者によって異なった。

この議論をもとに、目印となりうるオブジェクトについて「存続時間」「目に付きやすさ」を2軸とした表にプロットした。

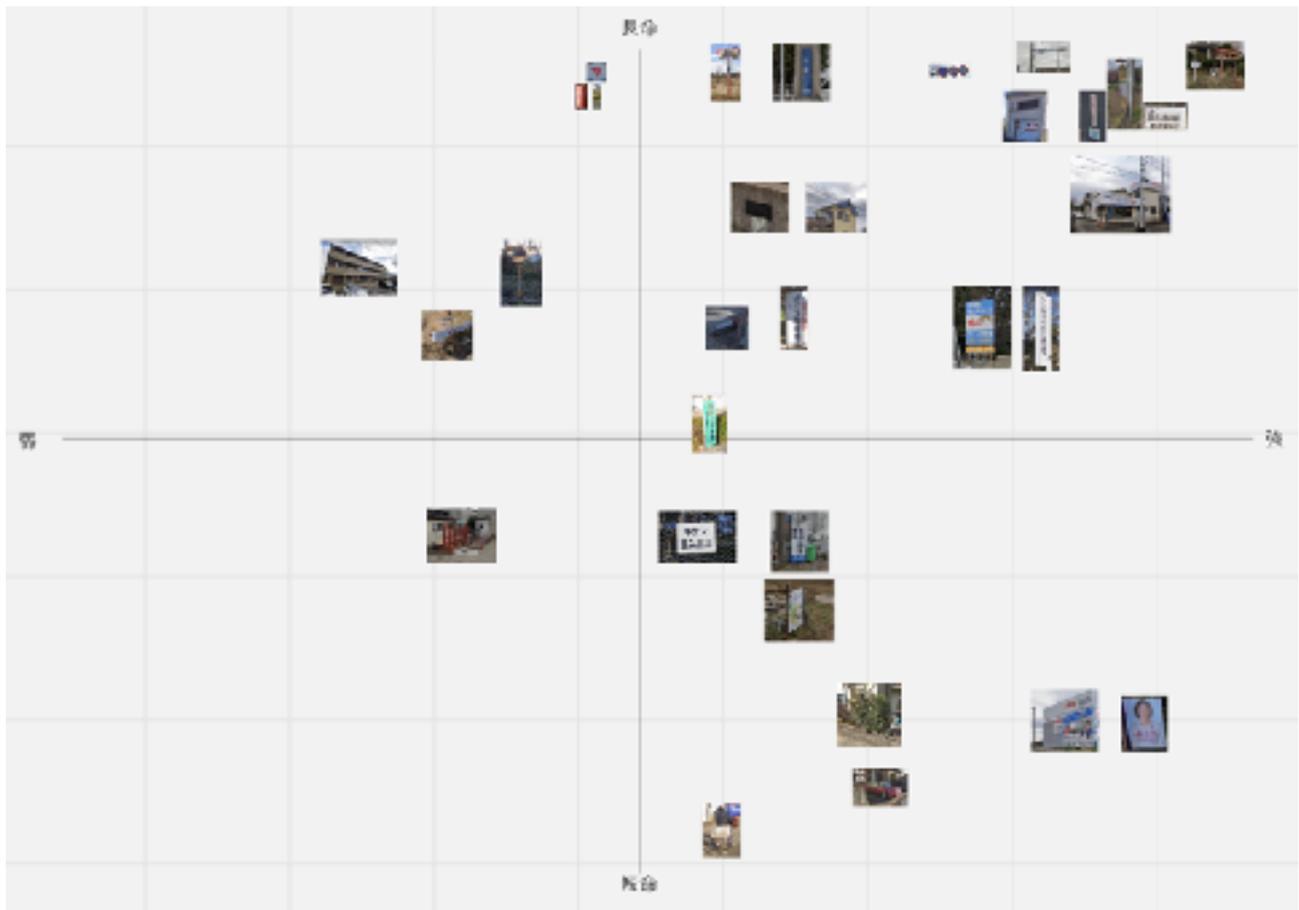


図6：ストリートビューを利用して遠藤内を調査し、目印になりそうなものの長命さと視認性の強さを主観で判断しプロットした。例えば選挙ポスターは視認性は強いが貼られる期間が短いと予想し、右下にプロットされている。

目印になるものを収集する中で、目印となるオブジェクトはそれが置かれている場所や地域を端的に示すように作られていたり、傷やよごれに周囲の環境が映っていたりするのではないかという気づきを得た。

## 5. 目印の地図の作成・目印の地図を利用したフィールドワーク

4での目印の議論をもとに、地図に目印になるオブジェクトのみを記載した「目印の地図」を制作した。

15分程度の散歩に利用することを想定し、遠藤全域を半径400mの4地域一森の自然(看護医療学部裏の竹林・森)・文化的施設群(秋葉台文化体育館など)・古くからの集落(宝泉寺など)・湘南ライフタウンーに分け記載した。

利用者が目印の写真から目印が示すものや周囲の環境などを想像することを促すため、写真から目印のオブジェクト以外のみを切り抜き記載した。また、より想像力をふくらませるための曖

味な情報として、オブジェクトの大体のサイズとオブジェクトそのものから想像しうる曖昧な事柄を文章で記載した。制作した「目印でめぐる遠藤ガイド」は以下である。

なお、制作のための調査は「a 森の自然」以外Googleストリートビューを利用した。

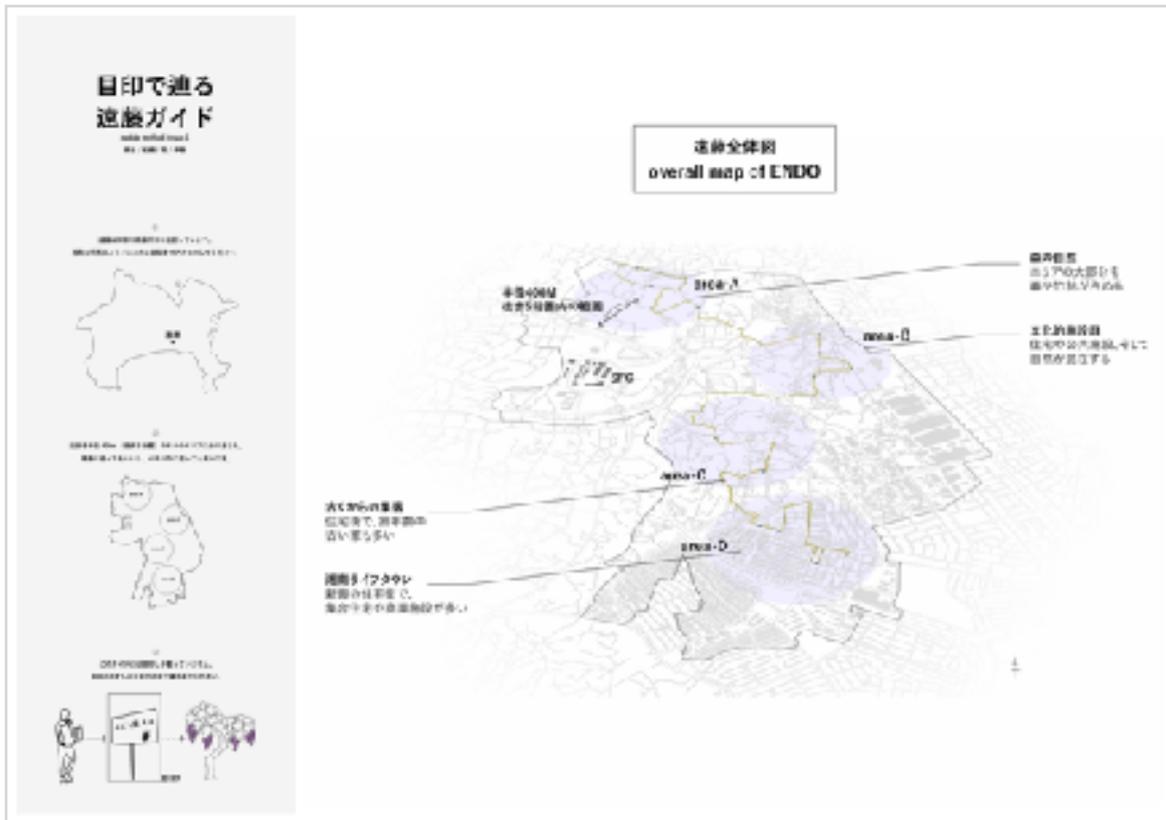


図7: 「目印でめぐる遠藤ガイド」表

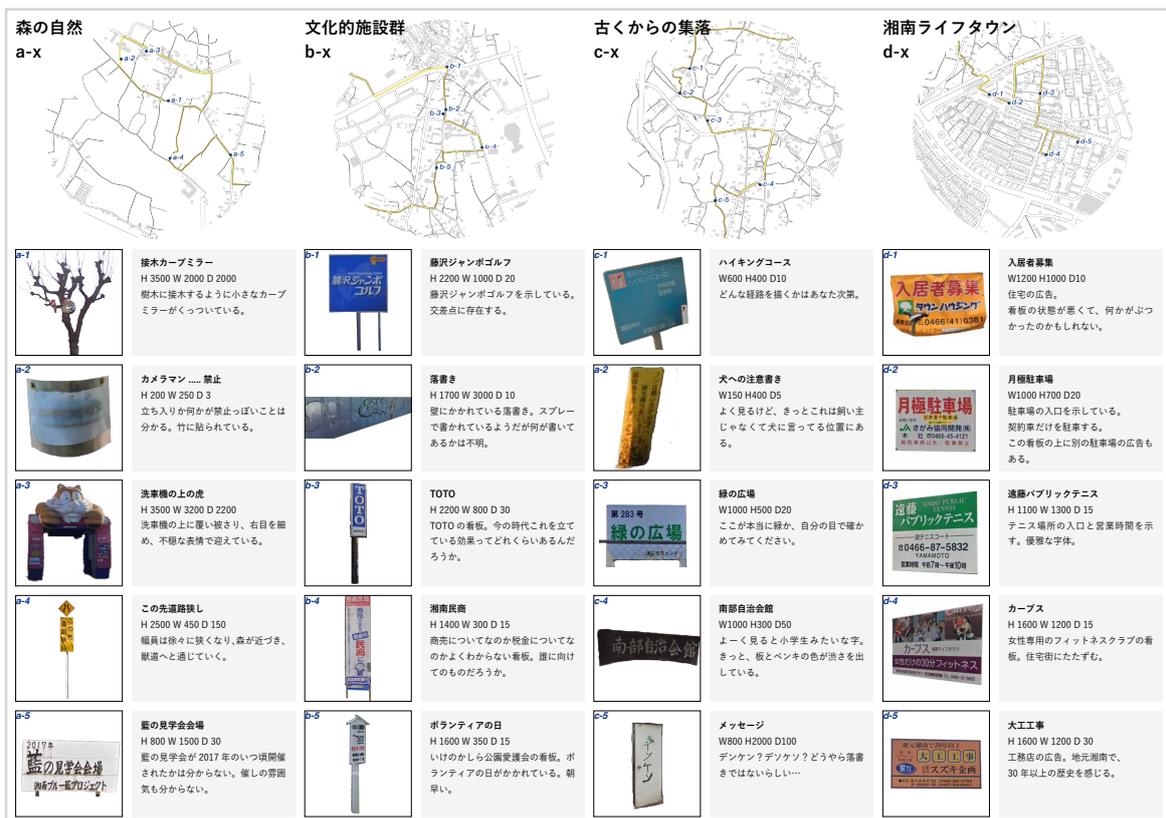


図8: 「目印でめぐる遠藤ガイド」裏



図9：「目印で巡る遠藤ガイド」

この制作物をもとに、実地調査を行った。

制作時に利用したストリートビューは過去に撮影されたものであったため、記載したオブジェクトの中には表示が変わっていたものや消滅していたもの、置かれ方が変化していたものなどがあり、オブジェクトに対して行われた人的処置や環境の変化を想像することとなった。さらに、遠藤地域は場所によって異なるものの2010年・2015年・2018年・2019年に撮影され、ストリートビューの履歴が残っている。事後振り返りの際、気になったものを時間をさかのぼって確認することができた。



図10(左)11(中)12(右)：2018年のストリートビューで確認した看板が、2021年7月の実地調査では別の看板になっていた。側面を見ると板が重なっていたことから、看板を塗り直したのではなく上から貼ったのではないかと推測した。

## 考察と今後の展望

今回のフィールドワークや地図の作成では、相手に伝えたり制作物を利用してもらうことを目標に自分たちが深く知らない遠藤の土地を調査した。相手が発見しやすいオブジェクトを目印として選択したり、記載されている場所に興味を持ってもらえるようわざと情報を隠し曖昧に提示することで、遠藤を多角的に観察した。

また、今回はGoogleストリートビューやGoogle Earthなどのオンラインリソースを利用して、フィールドワークやそれをもとにした地図・ガイドの作成、現地フィールドワークの振り返りを行った。これらを現地に対して解像度の低い疑似空間として捉えることによって、地域の調査を疑似空間・現実空間の2段階で行った。また、現地調査で発見したオブジェクトが過去にはどんな形で存在していたかや存在していなかったかを、ストリービューの履歴によって確認できた。

オンラインリソースを利用した現地に赴かないフィールドワークは、現在はまだ解像度が低かったり履歴年数が少なかったりするが、これからそれぞれ豊かになっていくと考えられる。リソースの進化を見越しながらオンラインと現地での調査を継続して行うことで、オンラインでのフィールドワークやオンライン・現地調査を併用したフィールドワークで調査できる事柄を蓄積していきたい。